

鹿児島県出水平野におけるツル類の基礎調査 第19報

1987—1988年期中におけるナベヅルとマナヅルの幼鳥の割合

*1 *2 *3 *4 *5
安部直哉・内田康夫・藤村 仁・藤井 格・柳澤紀夫

Studies of the Cranes in Izumi, Kagoshima, Japan. 19.

The Percentage of Juveniles of Wintering Cranes in 1987—1988.

*1 *2 *3
Naoya Abe, Yasuo Uchida, Hitoshi Fujimura,
*4 *5
Tadashi Fujii, and Norio Yanagisawa

-
- * 1 神奈川県相模原市旭町22-21, Asahi-cho 22-21, Sagamihara-shi, Kanagawa-ken.
 - * 2 東京都練馬区中村1-11-2, Nakamura 1-11-2, Nerima, Tokyo.
 - * 3 東京都中野区中野6-8-15, Nakano 6-8-15, Nakano, Tokyo.
 - * 4 広島県双三郡三和町敷名4704-1, Shikina 4704-1, Miwa-cho, Futami-gun, Hiroshima-ken.
 - * 5 日本鳥類保護連盟, 東京都渋谷区宇田川町37-10-405, Udagawa 37-10-405, Shibuya, Tokyo. Japanese Association for Preservation of Birds.

序

本報では、1987—1988年におけるマナヅルならびにナベヅルの幼鳥の割合について述べ、前年期（1986—1987年）との比較を行った。

本調査に参加協力された熊本県在住の小田文弘氏と俣田実氏、鹿児島県在住の田頭吉一氏にお礼申し上げる。

調査方法

調査時期と幼鳥の割合の算出法

ツル類の渡来が終了と考えられた1988年1月中旬と初渡去直後の2月中旬に調査を行った。幼鳥の割合の算出方法は前年期調査（安部ほか, 1988 a）と同じで、越冬総個体の全数抽出調査を目標として、数日間に行った中心地域と分散地域における調査結果を加算して、幼鳥の割合を算出した。

マナヅルについては、中心地域は1988年1月11日、分散地域は1月13, 14日に調査した。

ナベヅルについては、中心地域は1988年2月17日、分散地域は2月15, 16日に調査した。

調査結果と考察

マナヅルの幼鳥の割合

マナヅルの幼鳥の割合を中心地域と分散地域別にまとめて表1に示した。1988年1月13, 14日に行った分散状況調査では、日中、分散地域に出て生活していたマナヅルは計144羽で、幼鳥の割合は31.3%であった。

表1 マナヅルの幼鳥の割合（1988年1月中旬調査）

地 域	総 個 体 数	幼 成 調 査 数	幼 鳥 数	幼鳥の割合 (%)	
分散地域 (全地区)	1 4 4	1 4 4	4 5	3 1.3	
中心 地 域	東干拓地区	1 6 3	1 6 3	3 1	1 9.0
	西干拓地区	5 1	5 1	1 9	3 7.3
	給 餌 地 区	8 3 4	8 1 0	1 0 8	1 3.3
中心地域計	1,048 + 20*	1,024	158	15.4	
全 地 域 計	1,212	1,168**	203	17.4	

*この20羽については、本文中に記した。 **越冬総数1,310羽に対する抽出率は89%である。

1988年1月11日に行った中心地域の調査では、給餌地区内を東部・中央部・西部ならびに南部の3区画に分けて、分担調査を進めたが、一部の区画の担当班の手違いから、100羽前後の1群が未調査になった。そのため、中心地域におけるマナヅルの合計羽数は、実際の生息数より少ない、計1,068羽となった。表1の中心地域における個体数の合計欄に、+20と記したものは、調査中に3区画間を移出入した個体のうち、幼成別の計数が正確に出来なかった個体である。

中心地域における幼成調査数は1,024羽、幼鳥の割合は15.4%であった。

分散地域と中心地域を合計すると、全地域での幼成調査数は1,168羽で、本種の越冬総数1,310羽に対する抽出率は

89%, 幼鳥の割合は17.4%となる。

分散地域における幼鳥の割合が、中心地域に比較して高い理由は、マナヅル、ナベヅルともに、分散地域においては幼鳥を連れてくる家族の割合が高いからである。また、マナヅル、ナベヅルともに、中心地域内では西干拓地区における幼鳥の割合が高いのも、同様の理由によっている。ただし、中心地域内については、主として若齢未繁殖個体が多くを占めると考えられる群の分布状態によって、給餌地区、東西両干拓地区の区間あるいは区内の小区画での幼鳥の割合はかなり変化している。

ナベヅルの幼鳥の割合

1988年2月15, 16日に行った分散地域の調査では、幼成調査数は1,229羽, 幼鳥の割合は25.6%であった。

表2 ナベヅルの幼鳥の割合(1988年2月中旬調査)

地 域	総 個 体 数	幼 成 調 査 数	幼 鳥 数	幼鳥の割合(%)
分散地域(全地区)	1,231	1,229	315	25.6
中心地域	東干拓地区	1,144	1,144	17.4
	西干拓地区	578	578	29.2
	給 餌 地 区	3,467	3,467	16.6
中心地域計	5,189	5,189	917	17.7
全地域計	6,420*	6,418**	1,232	19.2

* 総個体数については、本文中に記した。 ** 越冬総数6,990羽に対する抽出率は92%である。

中心地域の調査は1988年2月17日の13時45分から15時30分に行った。この間、各地区間、区内における移出入はきわめて少なく、調査は順調に終了し、中心地域内の全個体について幼成が調べられ、幼鳥の割合は17.7%であった。

分散地域と中心地域を合計すると、総個体数は6,420羽, 幼成調査数は6,418羽, 幼鳥の割合は19.2%となる。

ナベヅルの越冬総数は6,990羽であるから、幼成調査の抽出率は92%である。上述の越冬総数6,990羽とこの調査における総個体数6,420羽との差は570羽である。中心地域の調査を行った1988年2月17日には、午前中に少なくとも15羽のナベヅルが初めて渡去している(安部ほか, 1990b印刷中)。午前中の天候は、渡去には不適な曇天であったが、標識個体の探索と生態観察中に、この15羽の旅立ちを偶然に発見した。これ以外にも、何羽かのナベヅルがすでに渡去していた可能性がある。さらに、上述の570羽の差の原因については、幾つかの理由が考えられるが、明確でない。

今年期の幼鳥の割合を基にした、前年期越冬鳥の生残率

マナヅル、ナベヅルともに、出水地方に毎年渡来・越冬している個体が、いわゆる同じ個体群とみなせると仮定して、前年期(1986—1987年期)の越冬鳥の翌冬までの年生残率を計算すると次のようになる。ただし、ナベヅルの標識個体J25, A51のように、年によって越冬地が変わっている例は知られている(安部ほか, 1988b, 1990a印刷中)。

マナヅルについては、1987—1988年期の越冬総数は1,310羽, その幼鳥の割合は17.4%であるから、満1歳以上の個体は1,082羽。前年期(1986—1987年期)の越冬総数は1,350羽, 故に、1986—1987年期の越冬鳥の翌冬までの年生残率は0.80となる。

同様にナベヅルについては、前年期(1986—1987年期)の越冬総数は6,520羽, その翌冬までの年生残率は0.87となる。

1986—1987年期の幼鳥の割合は、マナヅルでは20.2%, ナベヅルでは21.5%であった。これに対し、1987—1988年期には、マナヅルでは17.4%, ナベヅルでは19.2%であり、両種とも、前年期にくらべて、幼鳥の割合は低い値であった。

越冬総数と幼鳥の割合・家族構成別の家族数の割合などとの関係は、さらに資料を集めて検討したい。

摘 要

1987—1988年期的マナヅルの越冬総数は1,310羽, 幼成調査数1,168羽(抽出率89%), 幼鳥の割合は17.4%であった(表1)。

ナベヅルの越冬総数は6,990羽, 幼成調査数6,418羽(抽出率92%), 幼鳥の割合は19.2%であった(表2)。

1987—1988年期的にはマナヅル, ナベヅルともに, 前年期的に比較して, 幼鳥の割合が低かった。

出水地方に1986—1987年期的と1987—1988年期的に渡来・越冬した両種は, 同じ個体群とみなして, 1987—1988年期的の上述の幼鳥の割合を基に前年期的の越冬鳥の翌冬までの年生残率を求めると, マナヅルでは0.80, ナベヅルでは0.87となった。

文 献

安部直哉・内田康夫・藤村 仁・藤井 格・柳沢紀夫. 1988 a. 鹿児島県出水平野におけるツル類の基礎調査 第9報. 1986—1987年期的におけるナベヅルとマナヅルの幼鳥の割合. 自然教育園報告, 19: 47—52.

安部直哉・藤村 仁. 1988 b. 同上 第10報. 標識ツル類の観察資料 2. (昭和61年度). 自然教育園報告, 19: 53—60.

安部直哉・田頭吉一・藤村 仁. 1989 a. 同上 (印刷中).

安部直哉・内田康夫・藤村 仁・藤井 格・柳沢紀夫. 1989b. 同上 (印刷中).

安部直哉・田頭吉一・藤村 仁. 1990a. 同上 第18報. 標識ツル類の観察資料3. (昭和62年度). 同上報告, 21: 65—71.

安部直哉・内田康夫・藤村 仁・藤井 格・柳沢紀夫. 1990b. 同上 第17報. 分散地域のツルについて(昭和62年度). 同上報告, 21: 57—63.